



ほつとするね  
緑の府中

# 指導室だより

第 87 号

編集・発行 府中市教育委員会教育部指導室  
〒183-8703 府中市宮西町2-24  
電話 042-335-4063



〈教育随想〉

## 体力の向上を目指して

府中市教育委員会  
教育部副参事兼指導室長  
小 椋 孝

### ◆はじめに

「指導室だより」5月号に新任のあいさつを掲載させていただいてから、またたく間に年度末を迎えた感がある。昨年度までの3年間の都庁勤務では、季節感というものを感じることもなく1年間が過ぎ去っていく感覚があったが、毎朝、府中駅からケヤキ並木の中を市役所まで歩くなかで、四季それぞれの移り変わりを実感し、日々気持ちを新たに勤務に臨むことができていることを大変うれしく感じている。

### ◆体力の現状

現在、学力向上、体力向上、健全育成の推進が全都的に重点課題とされているが、特に体力向上について喫緊の課題であるとされている。

「健やかな体」の育成は「生きる力」の重要な要素とされ、近年、最重要課題の一つとされ

てきたはずであるが、全国調査の結果によれば、東京都の子供は全体として体格は全国平均値を上回るものの、体力・運動能力は全国平均値を大きく下回る状況である。

さらに府中市の子供は全体として東京都平均値を下回る状況であり、体力向上に向けた実効性のある対策が急務となっている。

今から30年前の小学生は、1日の歩数が平均2万7千歩程度になるくらい活動していたという報告がある一方で、現在の子供たちは1日平均1万3千歩程度であるという報告があり、子供の日常的な活動量の低下が体力低下の大きな原因であると考えられる。

特に東京都においては、生活環境やライフスタイルが大きく変容し、利便化が進んでいる反面、子供が外遊びや運動・スポーツを行うのに不可欠な要素である「時間」「空間」「仲間」のい

わゆる三つの「間」が減少しているという現状がある。

また、運動する子供とそうでない子供の二極化が特に顕著であるという傾向が見られ、大きな課題となっている。

### ◆体力向上に向けて

体力向上のためには、学校における指導の充実が不可欠であり、授業の充実に加え、学校行事も含めて体力向上に向けた意図的、計画的、継続的な取組を展開していく必要がある。何より、子供に体力の必要感を醸成していくためには、子供自身が必要感を理解し、積極的に運動・スポーツに取り組みむなかで、体を動かすことの喜びや汗をかくことの爽快感を味わうとともに、その「よき」を感じて夢中になって運動・スポーツに取り組んでいくことが重要である。まずは、日ごろの体育・保健体育の授業において、これらの実現に向けたきめ細かな働

き掛けと意図的、計画的な「掛け」を継続して行い、「運動の日常化」の実現をお願いしたい。なお、本市では体力向上委員会において実態をとらえた体力向上方策の検討が進められている。現在、委員の先生方のご尽力により来年度に向けた具体的な方策のまとめがなされており、来年度、各校の実践を通じて大いなる成果が期待される場所である。

### ◆最後に

義務教育段階の学校に求められていることは、子供の健やかな成長であり、何より子供自身が将来に向かって粘り強く努力していこうとする意欲と態度をはぐくんでいくことが大切である。様々な教育課題に対し、各学校がそれぞれの特色を生かしながら誠心誠意取り組んでいたに頭が下がる思いである。体力向上をはじめとして、これらの取組はすぐに結果が出るものではないかもしれないが、今後とも子供たちとの様々なかわりの機会を大切にしながら将来に向けた「耕し」をきめ細かに積み重ねていっていただきたいと切に願っている。

第45回 府中市立小・中学校特別支援学級連合学芸会

ちからを あわせて たのしい がくげいかいを



司会

府中市教育委員会、府中市立小・中学校特別支援学級設置校

主催による第45回府中市立小・中学校特別支援学級連合学芸会が、11月26日、府中の森芸術劇場「ふるさとホール」で開催された。会場は、来賓、保護者や家族の方々が満員となった。

はじめに、みんなのうた「ひとりじゃないさ」を全員で合唱し、心を一つにして連合学芸会の幕を開けた。

◆午前の部

いよいよ演技の開始。各学級が練習の過程で工夫したところや努力したことを紹介する。



はじめのことば

○府中第二小学校

「仲よしアラジン」は、子供たちの個性に合った役を考えて台詞を決めたオリジナル脚本である。大きな声を出すために、遠くの友達に呼びかけたり、動きを大きくするために、ビデオで動きを確認した。本人が気が付くことで、声も動きもパワーアップ。本番では、堂々と自信をもって演じることができた。

○府中第四小学校

子供たちが個々にお話の世界を充分楽しみ、そして主体的に活動できることを目標に取り組んだ。特に子供の個性を生かしたキャスティングや台詞の作成、子供たちをその気にさせる音楽（歌や効果音）・小道具・大道具の製作と毎回新鮮な気持ちで取り組める効果的な使い方を工夫した。

○府中第五小学校

今年度は、劇「ふしぎな三兄弟」に取り組んだ。個性豊かな仲間が次から次へと登場する物語。「相手を意識して話す」「〇〇のつもりで演じる」と、難しい課題に挑んだ。学芸会を通して、一つのことに向かって気持ちを合わせられる素敵な20人の仲間になった。大成功！

○府中第九小学校

舞台の上で子供たち一人一人が輝くように、子供の特性を生かした配役や台詞を選び、劇を構成した。

さらに、練習の過程では常に「自信をもって堂々と演じよう。」を大きなテーマに掲げ、台詞をゆっくりはっきり言うことや、しっかり前を向いて演じることなどを指導した。



○小柳小学校

今年度の劇の「仲よしバージョンそんごくう」は、国語の研究がきっかけになり取組んだ。台本は、手作り教科書に一役加え、配役は子供たちの希望を取り入れ、ほぼ問題なく決定した。「大きな声で ゆっくりと」を合い言葉に練習に取組んだ。練習を重ねるごとに上手になっていく子供たちに拍手！

○南町小学校

南町小学校は、「11ぴきのねこふくろのなか」を劇にした。はじめは役を大人が演じて見せ、どんなお話を伝えた。読み聞かせも繰り返し行い、子供から出てくる言葉やつぶやきを、台本にしていた。舞台上での動きもあまり大人が口出しせず、「ねこの気持ちになること」を大切に指導した。

◆午後の部

中学生による発表が始まった。府中第一中学校 新入生14名、全33名でスタートした超巨大な特別支援学級が、本番にはさらに35名に。役を増やすのにも苦労した。主役の三年生は連日猛特訓。声の大きさをばかりか、自分の弱点とも向き合う。演じる事に徹しさせる内に、やがて後輩らも真剣さを学ぶ。最後は仕上がりが予想よりちょっと良い。それが嬉しい。

○府中第二中学校

合奏「君の瞳に恋してる」合唱「Believe」ハンドベル「桜」を演奏した。合奏は、ポップスのリズムに合わせ、楽しく演奏できた。ハンドベルは、リズムが速く、合わせるのが大変だったが、曲を何回も聴いて自分のパートを覚えた。音がきれいにつながるように、皆、気持ち一つにして演奏した。

○府中第四中学校

合唱では、他の人の声をよく聞きながら歌う練習と歌う楽しさを味わえるようにした。合奏は、大人数のためどうしても音のズレが出てしまうので、リズムセクションの充実を図った。ハンドベルでは、各音量がバラバラにならないように注意し、和音を多く取り入れた厚みのある音作りをした。



わが校の特色ある教育 No. 52

# 「心のハーモニーを奏で、自分物語を作る『がっこう』」

府中市立新町小学校  
教務主任 長友 慎吾

本校の目指す学校は、「心のハーモニーを奏で、自分物語を作る楽校」である。すなわち、思いやりの心・探究する心・挑戦する心などがバランスよくはぐくまれハーモニーを奏でる子供が育つ楽校である。さらには、自分の思いや願いの実現に向けてチャレンジしつつ新しい自分を発見したり成長を物語のように楽しくつづつたりしていている子供が育つ楽校を目指しているのである。次に、楽校の特色ある教育活動をいくつか紹介する。

歌声広場



## ・美しい歌声と美しい心を はぐくむ「歌声広場」

本校では、月に1回「歌声広場」という音楽集会が行われる。これは、全校児童が体育館に集まり、今月の歌を歌う集会である。この「歌声広場」に向けて、毎朝、各クラスで朝の会時に、練習をしている。朝の学校は、子供たちのさわやかな歌声に包まれ、学校全体がまるでひとつのハーモニーを奏でているように心も清らかに洗われる。こうした毎日の取組みの積み重ねで、子供たちの歌唱力が付いてきている。歌声広場では、学年ごとにパートを分けて練習の成果を

披露し、最後にみんなで歌声を合わせて歌う。このとき、下級生は、高学年の歌唱力にあこがれ、「自分もすてきな声で歌いたい。」という思いを抱いている。この歌声広場を通して、みんなに練習する「仲間」の大切さ、心のハーモニーを奏でる「空間」の大切さ、これら三つの「間」の大切さを実感するよい機会ともなっている。

## ・生命の大切さをはぐくむ ヤギの飼育活動

本校の北側校舎には、1000㎡以上のスペースに「グリーンランド」という名称の雑木林がある。このグリーンランドを活かして、平成13年度より、近隣の東京農工大学の協力のもとに、ヤギの飼育を行ってきた。現在は「クッキー」、「シヨコラ」、

「チョコ」の3頭が生活しており、休み時間になると、子供たちがヤギに触れたり、話し掛けたり、様子について友達同士で声を掛合ったりする姿をよく見掛ける。総合的な学習の時間の中で、「大好きグリーンランド」を設定し、ヤギの飼育活動を行っているのは四年生である。えさや水の準備、グリーンランドの清掃など、積極的に取り組んでいる。

また、今年度は、四年生のアイデアにより「ヤギワンダーランド」というイベントが生まれた。これは、曜日ごとにヤギと触れ合う企画である。さらに、新町フェスティバル(子ども祭り)では、ヤギを中心とした遊びを企画した。このように、ヤギとのかかわりを通して、命の大切さや思いやりの心がはぐくまれている。

そして、三学期には、四年生が学んだ「ヤギの飼育の仕方」、「ヤギの生態」、「清掃の仕方」などを三年生に引き継ぐ集会が行われる。三年生と四年生と一緒に飼育活動を行っていく。こうして新町小の伝統が引き継がれ、新たなヤギへの活動が生まれていく。

## ・本校の学びの柱である研究

本校では、府中市教育委員会研究協力校として「自ら考え表現する子どもの育成」と主題を設定し、生活科・理科を通して研究に取り組んでいる。この研究では、感動・驚きなどを言葉で表現する、不思議・疑問を探る楽しさを表現する、実験・観察の結果をロジックを意識しながら話し合ったり、文章に表現したりすることができる子供の育成を目指しているのである。研究に迫るために、次のことに



ヤギとのふれあい

- ① 重点を置いていく。
  - ① 思考力・判断力・表現力などの力を付ける。
  - ② 仮説を立てて、筋道を立てて考えることを大切にしている。
  - ③ 導き出された結果を自分の言葉で的確に記録、表現できるようにする。
  - ④ 問題解決過程を確立し、自然事象に触れる場・仮説(予想)を立てる場・検証する場などを単元ごとに明確にする。
  - ⑤ 表現力を高めるために、話し合い、学び合いのスキルや場の工夫をする。
- 研究発表を平成23年10月21日(金)に行うので、多くの方々に来校いただけたらと思う。

わが校の特色ある教育 No. 53

# 「愉しく活動し、 進んで学ぶ児童の育成」

～理科・生活科の学習を通して～

府中市立本宿小学校

主幹教諭 星野 典靖

生活科「栽培活動」



## 1 はじめに

平成19年度末に発表されたOECD生徒の学習到達度調査の科学的応用力の調査結果において、日本の子供たちは前回の2位から6位へと順位を下げています。また理科を好きと回答する小学生は、平成18年には68%にまで落ち込んでいる(ベネッセコーポレーション調査より)。

このような理科離れを食い止めていきたいと考え、本校が「愉しく活動し、進んで学ぶ児童の育成」を研究主題に掲げ、理科・生活科の研究を始めてから今年度で3年目になる。

## 2 生活科での遊び

①知的好奇心を高める  
アサガオの栽培(一年)の学習では、鉢の外から見られない土の中の種の様子や根の張り方がどうなっているのか予想させて知的好奇心を喚起した。その後、その予想がどうだったか実物を具体的に観察したり、図鑑で細かく確かめたりしようとする姿が見られた。

野菜づくり(二年)の学習では、育てる野菜を自ら選ぶことで活動への興味・関心が高まり、自分の野菜だけにとどまらず友達の野菜の育ちや変化の様子にも目を向けるようになった。知的好奇心の喚起を繰り返す

ことで、その後の活動に一層意欲的に取り組むようになった。  
②気付きの質を高める  
五感を働かせ、色・大きさ・数・形等を比べて観察し、ワークシートに言葉やスケッチで記録したり、模型を作ったりして互いに発表し合った。このように個の気付きを学級全体に広げるような工夫を行うことで、対象に着目する視点を学び、知らなかったことに気付く楽しさ等身に付けていった。

## 3 理科での遊び

①自ら課題をもつ  
風やゴムのはたらき(三年)の学習では、ゴム飛ばしの活動から、長く引いた方がよく飛ぶことを体感した。それを踏まえ「車を遠くまで走らせるために、ゴムを長くのばしてみよう」という学習課題が生まれ、それぞれの方法を工夫し追究した。

②根拠をもち追究する  
空気の流れ(四年)の学習では、「玉が飛んだのは空気の流れであり、それを逃がさなければ飛ぶ」という根拠をもち、空気ですっぽうの中の空気を逃がさない仕組みは何かを追究した。  
③問題解決能力を高める  
おもりのはたらき(五年)の学習では、ふりこの一往復する時間を調べる際に、ふりこの長

さやおもりの重さ等の条件を変え、試行錯誤を繰り返しながら追究した。  
④科学的な思考力を育てる  
大地のつくりと変化(六年)の学習では、雨どいやアクリル管等を使って着色した砂を流し込む実験で砂や粘土を含む土が堆積していく様子を観察した。その際、目の前の事象に対する興味・関心から発展させ、事象の背後にあるメカニズムや実際に自然界で発生している事象に目を向けることができた。

## 4 本宿プロセスの創造

①指導過程を意識化する  
理科・生活科の学びを通して子供たちは学習の仕方を身に付けていった。本校では授業展開を「課題把握・予想・実験観察・結果・考察・結論」と段階的にとらえ、継続的に実践した。そうすることで、児童自身が授業に見通しをもって参加するようになり、先述のような学びが見られるようになった。

②子供の事実を踏まえる  
児童の実態(前時の様子、本時の内容における経験の有無、既習の達成度等)をしっかりと解釈し、子供の事実を明らかにした授業を構想した。  
③本宿プロセスとは  
指導過程を縦軸に、子供の事

実を横軸としてみると、「一回の授業の中のどこで「児童の何」を見取るかが明確になる。  
このように、一人一人を大切にしながら「愉しく活動し、進んで学ぶ児童」を育てるのが、本宿プロセスなのである。

## 5 おわりに

平成22年12月に実施した児童アンケートで、「理科・生活科の学習が分かる」と回答した児童は理科92%、生活科97%だった。これは3年間の研究の大きな成果である。今後も、この数値がさらに上がるよう努めていきたい。



高学年「理科」



＝適応指導教室「けやき教室」＝

# 「平成22年度の活動を振り返って」

けやき教室  
指導員 上野 俊枝

## ○「けやき教室」の生活

今年度は、在籍生徒は20名程で、三年生の生徒が多く在籍していた。

生徒一人一人の基礎学力を付け、自信を育て、学校復帰できるように、学習タイム4時間のうち3時間を教科学習に充ててきた。

昼休みや放課後の「けやきタイム」は、生徒たちの大好きな自由時間である。卓球やカードゲーム、パズル、百人一首などを楽しく過ごした。けやき教室では、この自由時間が生徒間でのコミュニケーションを活発にし、人間関係を築くための大切な時間になっている。

## ○「けやき教室」の学習

学習は、年間活動計画のもと教科学習、教科外学習（共同学習）、スポーツ活動を年間を通して行ってきた。

### 1 教科学習

教科学習は、主に個別の自主学习が基本で、生徒は週の予定表をもとに自主的に計画を立て学習を行ってきた。主として生徒たちは、国語、数学、英語を熱心に学習した。また、一斉授業の形態で国語、社会、英語、理科、家庭科、美術等に多くの

時間をかけて行った。書写は、講師による毛筆授業を10回行い、毛筆に親しむことができた。英語では、A・L・Tによる授業を2回行った。保健授業は4回実施した。

（理科）  
理科担当の先生のご指導で2回の理科学習を行った。顕微鏡を使った細胞の観察、スチロール・カップを使ったスピーカーづくりを行い、充実した学習になった。

（家庭科）  
食物領域と家庭生活領域の授業を行った。学期毎の調理実習には、多くの生徒が参加した。市立みどり幼稚園で行った保育実習では、自らの成長を振り返ることができ、支えてくれた家族への感謝の心をはぐくむことができた。

（美術・創作活動）  
人物画や静物画を描いたり、粘土や紙や卵を使って、工作や彫塑を行ったりした。このような活動を通して、ものを見る目を感じる心が育った。また、それらを表すために苦労したことにより、創造する喜びを得ることができた。

### 2 教科外学習

#### 「共同学習」

教科外の学習を「共同学習」

と名付け、けやき教室では重視している。集団で学び、活動することの少なかった生徒たちに協力・共同の大切さと活動を成し遂げたときの達成感・満足感を味わわせたいという願いからである。スポーツも含めて、毎日1時間設けている。

（パソコン学習）  
一学期には「文書作成」を行った。生徒は、好きな詩を選び、その詩に合う写真や絵を取り込んで作品に仕上げた。二期期には、カレンダーを作成した。また、三学期には表計算ソフトの使い方の学習に取り組んだ。

（菜園）  
生徒たちが、畑の畝作りから始め、野菜を育てた。猛暑の夏ではあったが、野菜はよく育ち収穫をして、調理実習に使うことができた。

（道徳）  
道徳の資料集等を使って、人として身に付けておくべき事柄や、努力して自分の長所を伸ばすことの大切さを取り上げた。

### 3 スポーツ活動

スポーツは、屋内で卓球、屋外でソフトバレーボール等の軽スポーツを行ってきた。年2回、生涯学習センターで、市の指導員からボール運動等の指導を受け、生徒は試合に熱中していた。

## 4 校外学習

春には、校外学習で「浅間山」へ行った。秋には、「水の再生センター」を見学し、きれいな水になるまでの行程を知る学習を行った。関連の学習として多摩川の水を採取し、水質検査をして確かめる学習も行った。1月には、府中市美術館へ行き、「いきるちから」をテーマにした展覧会を見学した。

1年間多くの学習や体験活動を行ってきた。生徒たちは自己理解を深め、達成感を感じ、自信を取り戻し、学校復帰に向けて大きく一歩を踏み出している。



◆水の再生センター見学

3月研修会・委員会等予定	日	曜	研修会・委員会等	会 場	研 修 内 容 等
	1	火	学校評価委員会	教 育 セ ン タ ー	事業評価、協議
	2	水	教育委員会表彰式	教 育 セ ン タ ー	表彰式
	3	木	教務主任会	教 育 セ ン タ ー	研修会、今年度のまとめ
	4	金	進路指導主任会	教 育 セ ン タ ー	今年度のまとめ
	4	金	環境教育推進委員会	教 育 セ ン タ ー	全体会、年度のまとめ
	7	月	生活指導主任会	教 育 セ ン タ ー	全体会、小・中分科会、年度のまとめ
	8	火	初任者等研修	教 育 セ ン タ ー	全体会、閉講式



リーダーに求められる資質とは何か。ある研修会で、リーダーに期待される基本的姿勢と役割として、講師は「ビジョン」「環境づくり」「人材育成」「外部折衝」の四点を挙げた。別の研修会の講師は、よいチーム作りができる監督の共通点は、「明るく、潔いこと」と「悪いことをしたときに悪いと言うこと」であるとしていた。リーダーについて考えるとき、「リーダーとは？」という問いを立て、求められる資質を拾い上げていくことが一つの方法であるが、もう一方には、リーダーと呼べる生き方をした人物から、その要素を引き出す方法がある。

## カエサルに見るリーダーの資質

真のリーダーと呼ぶにふさわしい歴史上の人物の一人に、「ユリウス・カエサル」がいる。共和政ローマ期の政治家、軍人であり、のちの帝政の基礎を築いたカエサルは、リーダーとしての資質を備え、いかにそれを発揮した人物と言えるであろう。カエサルの言葉に、次のよう

なものがある。『人間ならば誰にでも、現実のすべてが見えるわけではない。多くの人は、見たいと欲する現実しか見ていない。』この言葉は、状況を冷静に見極め、判断することの難しさを語っていると思う。人は、

往々にして先入見や主観で判断してしまう。しかし、何か重要な決断を迫られた際に、「たいしたことないさ」「このくらいは大丈夫だろう」という甘い判断は、時に取り返しのつかない結果をもたらす。リーダーには、冷徹な目で判断した上で、最悪の結果をも想定して、慎重に行動することが求められる。

もう一つ、カエサルのリーダーとしての資質に「一度決断したら、迷わずに目標に向けて突き進むこと」が挙げられると思う。カエサルが軍を率いてルビコン川を越えることで、ローマ帝国が内戦に突入することは確かだった。しかし、迷いを振り払って、カエサルは一步を踏み出した。ルビコン川を渡る際に、カエサルは次のように言ったと伝えられている。

『賽は投げられた！』

(指導主事 長井 満敏)  
(参考文献：塩野七生『ローマ人の物語』新潮文庫)

## 学びの窓

「ふるさと府中歴史館」が  
本年4月に開館

文化振興課文化財担当  
副主幹 江口 桂

文化振興課では、現在宮町図書館をリニューアルした「ふるさと府中歴史館」の開館準備を行っている。本館は、今から千三百年前に置かれた武蔵国府の国衙(こくが)役所)跡に立地していることから、武蔵国府を市内外に情報発信する施設として整備するとともに、本市の歴史の公文書等を収集・保存し、利用者の閲覧に供する公文書史料室や宮町図書館等も併設するものである。

特に、一階の「武蔵国府資料展示室」では、市民の皆さんの長年に及ぶご理解・ご協力によって実施してきた発掘調査成果に基づき、日本で初めて、国府の景観をバーチャル映像で再現したコーナーやデジタル郷土かるたコーナーなどを設置し、見て・ふれて・楽しみながら本市の歴史を学ぶことができるよう工夫している。

多くの児童・生徒に来館いただき、本市の長い歴史に培われた伝統と文化の継承を担う中核施設として運営してまいりたい。

## あとがき

柔らかな日差しの中に、季節の到来を告げる風景がある。弥生3月。学校では、今年もまた門出があり、別離がある▼学舎を巣立つ子供たちの姿は、頼もしくもあり、寂しくもある。幼顔から雄々しく成長した様に、保護者や教師は、感慨と安堵感に浸ることもあるだろう▼高村光太郎の第一詩集「道程」の中の、『僕の前に道はない。僕の後ろに道は出来る。』という言葉が、私は好きだ。子供たち一人一人は、それぞれの生活の中で、自分なりの道を歩んだに違いない▼その歩みの中で、学業の、あるいは人生の土台となるような知識や知恵を蓄えることができたであろうか。子供たちの自分探しの旅は、まだまだ続く。新たな出会いが、新たな一歩が、彼らの未来を創る。その前途に幸あれと祈る▼さて、小学校では、今年4月から新学習指導要領が完全実施される。教育改革には、多くの困難や試練が伴う。各校の教育が、さらに飛躍されることを願い、先人の言葉を贈る。「人間は、あまり必要でないことを多く学ぶ方がよい」(バーナード・ショウ、イギリス・劇作家) (小澤 宏)